

# 「ウェルビーイング」の哲学的基礎について

## On the Philosophical Foundations of *Well-being*

宇 野 光 範

### 要 旨

ウェルビーイングとは何か。本論ではまず、現代のウェルビーイング論を、「～だけではない」という表現によって拡張される言語形式を持つものとして着目し、旧来の哲学的幸福論から区別することを提唱した。ウェルビーイングを扱う際の、このような言語形式から必然的にもたらされる課題として、実践的な課題としては測定における恣意性を、理論的な課題としては外延の無矛盾性の確保を指摘した。ウェルビーイングの思想的内容として一貫して緊張関係を持つのが、ヘドニア（快楽）とユーダイモニア（幸福）の関係である。本論では、一方では「ウェルビーイング」の語彙に過度の哲学的負荷を与えない警句として、18世紀初頭に現象主義哲学を展開したパークリーの主要著作において、現代と類似した日常的な用法で“well-being”という語彙が用いられていたことを見た。さらに、ヘドニアとユーダイモニアとを対立事項としてのみではなく、最高善であるところの快楽を幸福と同一としたアリストテレスを想起し、現代における「ウェルビーイング」が、快楽をめぐる丁寧な分析を通じて熟成されていく可能性を論じた。

キーワード：ウェルビーイング、快楽、幸福、ヘドニア、ユーダイモニア（エウダイモニア）、パークリー、アリストテレス、教員養成

### 1. はじめに

令和5年の次期教育振興基本計画（中教審答申）のコンセプトには「日本発の調和と協調に基づくウェルビーイングを発信」することが掲げられている。本論を通じてその先に追求したいことは、ウェルビーイングという概念を教員養成教育でどのように扱ったら良いのか、ということである。実践的課題である教師のウェルビーイングや児童生徒の心身における幸福は、「ウェルビーイング」という語彙を大学教育でどのように使用するのか、ということに大きな影響を受ける。教師をめざす学生たちが抱いて卒業する「ウェルビーイング」の意味が、実践的教員としての人格形成や学校内外での活動を通じて、教師としての生き方そのものや児童生徒の学校生活に立ち現れることになるからである。

しかしそのためにはまず、「ウェルビーイング」という言葉がどのような性質を持つものであるのか、という地ならしを避けて通ることはできないと私は考える。「ウェルビーイング」

という日本語の語彙は、それが“well-being”（ただしwellbeingとの区別はしない）の翻訳として様々な文脈で多用されているものの、「ウェルビーイングとは何か」という問題は、現状では語用論上の交通整理と思想的な成熟の過程とが錯綜した状態で扱われている。そしてそれが旧来の「幸福」論とどのように異なっているのかは、教職に携わる我々のみならず、実生活における一般的な言語使用においても整理をすることが困難であると思われる。「日本発の調和と協調に基づくウェルビーイング」の中身を構築（そして実践と発信）していくにあたり、「ウェルビーイング」という語彙をめぐる認識をより鮮明にしていくことが望まれる。

## 2. “Well-being”という語彙の第2、第3の歴史

「ウェルビーイング」が“well-being”の訳語である、という点においては、“well-being”という語の3つの歴史を省みることが我々に示唆を与えてくれるであろう。

第1の歴史は、第二次世界大戦以降のこの語の発展であるが、その発端として、1946年の世界保健機構（WHO）憲章前文における「健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいいます（Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.）」という、健康の「定義」をあげることには無難であろう。“well-being”という語に対する「すべてが満たされた状態」という日本語訳は、日本WHO協会が「21世紀の市民社会にふさわしい日本語訳を追及し、理事のメンバーが討議を重ね、以下のような「WHO憲章（日本WHO協会訳）」を作成（掲載Webページより）」したものであり、2023年度現在で現行のものである。その一方で現在の日本社会において「ウェルビーイング」という訳語が一般化したことには、「ウェルビーイング」が「訳語」としてだけではなく「造語」あるいは「新語」としての役割を持っていることの表れでもある。我々がいま概念の交通整理を試みているところの「ウェルビーイング」の使用は、現代のこの文脈における意味のものとなる。

我々はまた、“well-being”の第2の歴史について、本論において新たに着目したい。「2つ目」というのは現代の興味関心時における優先順位の問題であって、時間軸上はこの2番目の着目点が過去となる。それは“well-being”という英語表現そのものの黎明期である17世紀、18世紀の英語圏におけるこの語の使用であるが、本論においては、主観的観念論哲学を展開したジョージ・パークリー（George Berkeley, 1685-1753）の主著の一つである、『人知原理論（*A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge*）（1710）』で1回のみ登場する“well-being”の使用法に着目する。（その前年に発表された*A New Theory of Vision*（1709）、また彼の他の著作においても、well-beingの表記が見られることは第6節で扱う。）Oxford English Dictionaryのquotationsセクションにおいて、パークリーの1713年における雑誌記述においてこの語の使用が確認されているが、これらの彼の重要な著作においても“well-being”の語が使

用されているのである。

「人知原理論」での使用法はパークリー哲学を際立たせる点において大変に大きな役割を果たしていると解釈することができるが、さらに興味深いことには、「常識」や「日常生活」といったことと結びついた彼の“well-being”の使用法（そしてそれは当時の通常の使用法として適切なものであったと考えられる）は、現代日本における我々が「ウェルビーイング」という概念に哲学的負荷を与えようとしかねない姿勢に、軽快かつ適切な警鐘を鳴らしてくれるものであると考えている。

さて、「ウェルビーイング」の第3の歴史とは、これからの未来の歴史とも言えるが、それは「ウェルビーイング」のアリストテレス倫理学における幸福論との対照、という点で、第1第2の歴史よりもさらに時を遡る可能性を持つものである。ウェルビーイング論と幸福論の質的違いについては次節以降に論じるが、「ウェルビーイング」にとって「幸せ」が重要な役割を果たしていることは、そもそもの語の成り立ちからして誰もが認めるところである。つまり、“well-being”と“happiness”の相違にこそ、「ウェルビーイング」の意味が際立つのである。一方、かねてより幸福論において“happiness”という英訳が微妙な位置付けを担っていた概念が、アリストテレス幸福論における「ユーダイモニア (eudaimonia)」である。（日本の哲学では「エウダイモニア」という表記が伝統的、英語読みは「ユーデモニア」に近いが、本論では中央教育審議会の内田由紀子氏に倣い「ユーダイモニア」表記とする。）「ユーダイモニア」はアリストテレス幸福論にとって人間の最高善に相当する重要なコンセプトであるが、“happiness”という英訳語が当てられつつもそれが必ずしも完全に適切ではなく“doing and living well” “well lived”等と説明されてきた用語である。少なくとも英語表現で見る限り、“well-being”に通じる何かが含まれていることは否定し難い表現となっている。内田（2022）は“happiness”を「より短期的で個人的な状況・感情状態」とし、“well-being”を「より包括的で、個人のみならず個人をとりまく「場」が持続的によい状態であること」として説明しているが、同時に、ユーダイモニアをヘドニア（快楽）と対比した上で、ウェルビーイングは短期的な快楽によるのみ評価されるものではなく、ユーダイモニア（内田はこれを「生きがい・人生の意義」と注釈している）の重要性を評価することについても指南している。

これらのことから「ウェルビーイング」が場合によっては「ユーダイモニア」の訳語としても成立しうるようなものであるか、ウェルビーイングはユーダイモニアを「含む」ものであるのか、という可能性が示唆されることになる。ウェルビーイング論と幸福論の関係や対比において、アリストテレス倫理学と「ユーダイモニア」の再解釈がなされる可能性が、「ウェルビーイング」の第3の歴史としてここで提示したいことである。アリストテレス倫理学においては、ヘドニアとユーダイモニアは対立概念ではなく、それどころかむしろ快楽こそが幸福（ユーダイモニア）である、とするものであるが、これらを顧みることは、ウェルビーイング論における「快楽」の再評価につながるのではないかと考えている。

### 3. 「ウェルビーイング」と「幸福」の言語形式における違い

ウェルビーイングとは何かを考えることを、「ウェルビーイング」という語彙の使用法に関する分析や反省から切り離すことはできない。

一方で我々は、「幸福とは何か」を考えることと「私たちは『幸福』という語をどのように用いているのか」ということをそれぞれ別々の問題、あるいは異なった視点からの問いとして捉えることができる。幸福がいかなるものであるかは仕事帰りの居酒屋で友人と語ることができ、『幸福』という語彙の使用法については、言語学的な、あるいは分析的な哲学の営為として実践することが可能である。そして我々が真剣に「幸福」という一般名詞の意味について考える時、我々の思考は居酒屋と研究室の二つの椅子を往き来している。どちらの椅子に座っている時間が長いかは、思考のスタイルによる違いである。

しかし、ウェルビーイング論は、幸福論とはその根本的性質を異にするものであり、我々が扱うべき態度も異なってくる。そしてその性質の重要な違いは、幸福論（そしておそらくは私たちが人生において重要だと扱う哲学的話題の多く）が「とは～ではない」という言葉の形式で語ることができるものであるのに対して、ウェルビーイング論は、「とは～だけではない」という形式を持つことによっていると考えられる。我々は「幸福」について、「幸福とは年収の高さではない」「幸福とは短期的快樂の総量ではない」等々と語ることができる（そしてその真偽についての立場を取ることができる）のに対して、ウェルビーイングは、「ウェルビーイングは年収の高さだけではない」「ウェルビーイングは身体的健康だけではない」「ウェルビーイングは短期的快樂の大きさだけではない」といった言語形式を持つものである。

この点で、ウェルビーイング（well-being）論は幸福（happiness）論へと収束することはなく、独自の分析と思考の対象となるものである。同時に、「ウェルビーイング」という語彙は「～だけではない」として拡張されていくその形式ゆえに、意味の外延におけるインフレーションを起こす可能性を持っている。常識において人にとって都合の良いと思われる性質が、どんどん「ウェルビーイング」の要素として盛り込まれてしまうのである。具体的には、「身体的健康」「心の健康」「金銭的な裕福さ」「安全」「人間関係」等々、ウェルビーイングの外延的性質は、膨れあがっていくことになり、「～だけではない」という形式は、終止符を打つことなく新たな性質を取り入れ続けていくことになる。これが、“well”と“being”という極めて一般的な表現からなる語としての、語の形式における宿命である。

こうして、ウェルビーイングの外延的性質が増えることの課題は、実践的側面、理論的側面の両面において発生する。

### 4. 実践的課題

実践的側面における課題は、ウェルビーイングの「測定」をめぐる表面化する。まず、ウェルビーイングが何らかの形で測定されなければいけないのは、WHO以降のウェルビーイング

のコンセプト自体が、生活者である人々の生活の質の向上を目指すところに生じた概念だからであり、これは概念上の要請であり、前提である。いかなる意味においても測定不可能なものは、生活の質の向上に有効であったとしても検証不可能であり、政策的実践につなげることが難しいからである。(ゆえに「ウェルビーイングは測定可能か?」という哲学的問題は発生しない。)もちろん、ウェルビーイングにとって大切な要素について、それらの測定の簡易さによって逆にそれをウェルビーイングの要素として規定することはできないため、増大していくウェルビーイングの各要素を何らかの形でカテゴライズしたり、詳細な測定方法を模索するという方法論上の課題が増大していくことになる。

現在、OECD (2022) のBetter Life Index では、以下の11の指標において測定作業がなされている：**Housing, Income, Jobs, Community, Education, Environment, Civic engagement, Health, Life satisfaction, Safety, Work-life balance.**

いわゆる客観的ウェルビーイングの指標（主に物理的な計量化によって測定可能：ただし、国別の比較には変換換算方法の適正化が必要）に加えて、「生活／人生への満足度」は主観的なウェルビーイングにおけるユーダイモニックな側面を測定するものであり、社会参画など他者との関わりに関する満足度も測定指標に含まれている。

Hawkins (2014) によれば、オーストラリア統計局 (ABS) ではGDPやGPI (Genuine Progress Indicator) に加えて、Society (*Sc*), Economy (*Ec*), Environment (*En*) の3項目において、それぞれ指標として、( ) 内の指標項目をあげている。

***Sc* (Health, Education and training, Work, Crime, Family, community and social cohesion, Democracy, governance and citizenship) ,**

***Ec* (National income, National wealth, Household economic wellbeing, Housing, Productivity),**

***En* (Biodiversity, Land, Inland waters, Oceans and estuaries, Atmosphere, Waste)**

このオーストラリアの指標から特に見てとれることは2点ある。1つ目は、Inland watersなど、ウェルビーイングに関係する指標が地域に根ざしたものであり他の地域では指標も変わってくるであろうことである。例えば水の豊かな日本では内水域の指標はこのカテゴリーに出てこないかもしれない。2点目は、「経済」の指標カテゴリーの中に「家計のウェルビーイング」という項目が存在することである。全体としてウェルビーイングの測定であるという前提の中でのサブカテゴリーに「ウェルビーイング」という語彙が注釈なく使われる、という、語彙の階層性は、「ウェルビーイング」が基本的概念に近いものであることを示しているといえよう。

さらに、Hawkinsの同資料では他のさまざまな地域のウェルビーイング指標を紹介しているが、それらは各国の状況を反映したものであることを見てとることができる。カナダにおけるCanadian Index of Wellbeing の8つの指標（それぞれに同じウェイトが置かれている）は、生活水準・健全な人口・コミュニティの活力・民主主義的参画・余暇と文化・時間の使い



方・教育・環境（宇野訳）、となっており、国家相対的な全体的な生活水準の高さが想像されるものとなっている。また、ブータンでは国民総幸福度（Gross National Happiness）と呼ばれる独自の指標のもとに、持続的発展・文化的価値・自然環境・良好な統治（good governance）、という4本柱を設けていると報告されている。

「ウェルビーイング」という語彙の意味において、その外延的な要素が増大したとしても、我々はその要素の全てを測定することが不可能である。これは自明のことであり、それは測定上の課題を生むことにはなるものの、測りきることができないという作業上の問題が、それ自体でネガティブなものとなるわけではない。他方で、ここで取り上げた資料から分かることは、ウェルビーイングの測定においては、普遍化と局所化の逆向きの方向性が必然的に内在する、ということである。例えば、オーストラリア、カナダ、ブータンにおいては、それぞれの地域で独自に強調される特性について、指標が掲げられることになるが、どの項目が強調されるかについては、各国政府によるガバナンスが生きてくることになる。つまり、それぞれの国にとってどのようなことをウェルビーイングにおいてより重要と捉えるか、というそのものについて、国や政府のリーダーシップが発揮されている、ということである。これは言い換えると、ウェルビーイングの指標自体は完全に民主的なものとして決定されているのではなく、国家的戦略が見える形で形成されている、ということになる。

この事実は、「調和と協調に基づくウェルビーイング」を掲げる日本を客観的に評価する上で、大きな示唆を与えることになるだろう。

以上の局所化と同時進行でおこる普遍化は、測定指標の共通化から生じるものである。例えばOECDの指標は、さまざまな国において測定可能、という点において普遍性を要求するものであるが、その指標については必ずしも各国独自の指標を集めたところの「最大公約数」的なものになっているわけではなく、むしろ進んで世界の未来を形作ろうとしている意思を持った指標となっている。先述の「生活／人生への満足度」という指標や、「ワークライフバランス」の項目などは、こうした項目が指標となることそのものが、人々のウェルビーイングのありかたを規定していく、という性格をもつものである。例えば1日24時間働き続けることを目標とし美德とする文化であれば、1日8時間しか働かない労働者よりも16時間働く人の方が「生活／人生への満足度」が高くなることが予測される。しかしその文化においては「ワークライフバランス」の評価が低くなる。すなわち、全体的な評価を高めようとするのであれば、これらの指標に沿う形で国家戦略を練る必要があり、逆向きに見れば、自国の美德に有利な指標が普遍的指標となれば、それはその国のウェルビーイング度を高める、という測定結果を導く構成となっている。

これは善悪の問題ではなく、ウェルビーイングの測定がどこまでいっても相対的なものとなる、ということを示しているのであり、国家間における文化相対主義との距離の取り方が問われる構造になっているということを示唆している。例えば、2023年現在公開のOECD Better

Life Indexにおいては、日本のランキングにおいて「市民参加（Civic Engagement）」「ワークライフバランス」「収入」「人生の満足度」がこの表記順で特に評価の低い指標項目となっている。もちろん一般常識的には社会的改善によってこれらの評価を上げることが良い、という前提を保持した上で、社会的改善を伴わずにランキングを上げる方法について、方法論的戦略を練ることも可能である。それには、各項目の内容について「文化的読み替え」をすることが最も簡単である。例えば「市民参加」について、日本の伝統的文化において市民参加は政治参画という狭い活動を意味してきたのではない、という意味の読み替えを行なったと仮定しよう。すると、自分の敷地前より少しお隣さん寄りのところまで道路を掃くとか（そもそも個人が市道の掃除をする！）、献身的な自治会活動、地震被災地でのボランティア活動といった、さまざまな日本的「美德」を、「市民参加」カテゴリーのもとに読み替えることが可能となるであろう。「ワークライフバランス」については、定時に仕事を終えて完全なプライベートタイムを確保するモノクロニックな時間の使い方に対して、24時間「営業」の釣り餌屋で中でテレビを見たり寝たりしていながら外から客に呼ばれた時だけ店頭に出て餌のイソメを売る、といったポリクロニックな時間観を強調することができるかもしれない。「収入」については、「お金」を伴わない経済活動がいかに日常的か：海外出張のお土産をお隣さんに渡したところ網でとれたての鮮魚をもらって戻ってきた、という貨幣を伴わない価値の交換で補填することができるともかもしれない。こうした「読み替え」を行えば、社会的改善を伴わずにランキングを上げることが可能となる。社会的変化を伴わないということは、見方を変えれば、社会的改善を避けていることでもあるから、相対的に立場の違う見方をすれば、「文化的読み替え」の作業がその文化内においてポジティブな評価につながることも十分にありうるのである。

「日本発、調和と協調に基づくウェルビーイング」はこうした文化的読み替えを伴うものであろうか。世界に「発信」する、という意味を持つ限りにおいては、日本の美德を世界に広げる、という積極性をも内在する可能性は否定できない。その場合にはこの「読み替え」は、よりポジティブな意味で「書き換え」にもつながる可能性を持つものとなるが、世界市民の一員としての誠実さや冷静さも合わせて持つ責任が伴うであろう。

## 5. 理論的課題

ウェルビーイングの内容的性質と、それに伴って測定指標が増大することの理論的課題は、ウェルビーイングの意味の性質内での無矛盾性の確保である。つまり、ウェルビーイングの条件のリストが長くなった際に、その内部に矛盾が含まれていないかの確認の難しさである。例えば、もしウェルビーイングの要素として「家計の豊かさ」と「貧困」の両方が含まれてしまうことがあるとすれば、「ウェルビーイング」は意味内部に矛盾を含む概念となってしまう、ふさわしくない。そして「ウェルビーイング」が一般の人々の生活に関する語彙であることから、ここで問題となる矛盾とはAと否Aが同時に存在するという論理的矛盾ではなく、実生活

上両立が不可能な内容を持てば十分である。上水道の水栓をひねった際に「安全で清潔な水」が出てくると、「泥水」が出てくるとは、矛盾としてよい。というのも、水道からきれいな水が出てくることがウェルビーイングの一つの性質であるとするならば、同じ水道から泥水が出てくるとは、ウェルビーイングに反することだからである。

この無矛盾性の確証についての最もシンプルな答えは、性質の外延はその性質のみによって規定される、という当たり前のことを確認することで十分である、とするものである。「白いもの」を集めるにあたって、その集まりに入れるか入れないかの基準となるのは白さそのものであって、白さ以外の何か別の基準を用いるわけではない。だから「白い」ものばかりを集めて作成したリストに「黒いもの（白くないもの）」が紛れ込むことがないのは自明なのである。集合の要素間に矛盾が存在することを恐れることは、集合の各要素がその性質を満たしているかの確認方法を疑うことであり、これは「素数の集合の要素に2以外の偶数も含まれてしまうのではないか」と心配することと同じくらい馬鹿げたことだ、と答えることができそうである。

しかしこの論法を「ウェルビーイング」に当てはめることは、ウェルビーイングの普遍性を前提する、という最も大きな飛躍を犯していることになる。そしてここで問題となるのは、ウェルビーイングが普遍性を持つ概念であるのかどうか、という判断ではない。これが、我々が「ウェルビーイング」をどの程度客観的なものとして扱っているかという慣習の記述であるにもかかわらず、その慣習そのものが現在進行形で形成途上にある、という事態への対応の方略が問われているのである。それでは、ウェルビーイングがどの程度相対化可能な概念であるのかを、どのように分析すれば良いのか。ここでひとつの、架空のウェルビーイング・リストを想像してみよう。いま、宿題を終えていない太郎にとって明日の学校授業が存在しないことはウェルビーイングの指標の一つとなっているとする（太郎は学校がなくなることを望んでいる）。しかし太郎が学校の非存在を願うのは、たかだか明日までであって、永遠に学校がなくなってほしいわけではない。校舎が誰かによって爆破されるのは望まないが、校庭隅の百葉箱に隕石片が落ちるくらいであれば、構わない。このとき、社会全体のウェルビーイングのリスト全体は次のような形になるだろう。

ウェルビーイングの指標（リスト）

…

…

学校授業があること（ほぼみんな、ほぼずっと）&学校授業がないこと（太郎、明日、学校に大した被害がない限りにおいて）&学校授業がないこと（〇〇市周辺住民、災害の指定避難所として機能する間、被災者支援に役立つ限りにおいて）& …（以降、学校授業がないことを望む局所的な条件が続く）

（新項目）



...

...

(以下指標項目が続く)

このようなリストであれば、立場の違いこそなければ、ウェルビーイングの性質において「学校授業があること」と「学校授業がないこと」の間に矛盾は生じない。矛盾がないにも関わらず、人は、「太郎」の項目自体をこのリストに含めたくないと感じるかもしれない。しかし、このリストの形式は、第一印象ほどには滑稽なものではないのである。太郎が明日学校授業がないことを望むことについて、人は、それを彼のわがままと呼び「ウェルビーイング」からの排除を望むかもしれないが、被災地の避難所利用については、それが地域住民のわがままである、とはしないであろう。そして浮き彫りとなるのは、

#### **学校授業があること（ほぼみんな、ほぼずっと）**

とした際の、「ほぼみんな」「ほぼずっと」とは、決して民主主義的多数を表しているのではなく、むしろ反対に、「ウェルビーイング」の背後に倫理的な別の基準が存在していることを示している、ということである。「太郎」と同じ希望（＝明日学校授業がなければよい）を持つ人の総数がかつても過半数であったとしてもウェルビーイングに関する判断はすぐには変わらず、被災地の地理的範囲がいかに限定的であったとしても、学校が避難所として機能することは多くの人が是とするであろう。これは、「ウェルビーイング」の性質の規定がウェルビーイングの概念によってのみ規定される、という先の前提が間違っていたことを示している。「白さ」という基準で「白いもの」を集めてできた集まりとは異なった方法で、ウェルビーイングの指標や性質は作成されているのである。

2023年現在の我が国におけるウェルビーイング論においては、「ウェルビーイング」を基本的な概念に近いものとして扱いながらも、「太郎のわがまま」の類を排除する道具立てとして、ヘドニア（短期的快楽）に対するユーダイモニアの重要性を解いているように思われる（中教審，2022）。しかしこれは、哲学的幸福論をウェルビーイング論に吸収しようとする試みであり、重要な哲学的議論を再確認するものではあっても、当初の目的である「ウェルビーイング」という語彙の明確化をもたらすものとはなっていないと思われる。

先の思考実験で、明日学校がないことを望む太郎の「ウェルビーイング」は、宿題が終わっていない苦痛から短期的に逃れたいとする、太郎の短期的な快楽、すなわちヘドニアによるものである。「生きがい・人生の意義（内田，2022）」といった、より長期的な視野からは、太郎自身もまた学校授業の存在を望んでいる、と推測するものである。そして、太郎にとっても、ヘドニアよりもユーダイモニアが優先するだろう、という架空の推論がここには挿入されているが、その背後には、ユーダイモニアがヘドニアに、倫理的に優るものである、とする前提がバイアスとして入っているのである。我々の常識は、短期的快楽を長期的意義よりも優先させ

ようとする思考について、批判的であるように仕組まれているのである。

このことは、被災地における避難所としての学校利用の例によって明確になる。避難所としての学校利用が意味を持つのは、ユーダイモニア的な意味よりも、ヘドニア的な意味においてである。今晚食べるものがなく、寝るところがなく、暖をとることができない。この短期的困難を、アド・ホックに救済し、短期的な快楽を提供するのが、避難所の意義である。(アド・ホックは、「その場に応じて」という意味であると同時に「その場しのぎの」というネガティブな意味でも使われるが、ここにも我々の思考バイアスが隠れている。) 避難所が被災者に提供しているのは、目先の、快楽(ヘドニア)に他ならず、ヘドニアが満たされることこそが、最大の意義となっているのである。避難所が与えるウェルビーイングと、指定避難所制度という政策が与えるウェルビーイングとは別のものであるから、前者の話を後者ですり替えてはならない。学校が授業をやめ避難所として被災者に提供するヘドニアは、ヘドニアのままをもって、一般的な人々に倫理的に「善」であると思わせるものであるはずである。

ここでも重要なのは、我々が「快楽」という語、そして「目先の」という表現に対して持っているバイアスを、まずは取り除くことにある。しかしながら、これは実際には、簡単な作業ではない。アリストテレスの『ニコマコス倫理学』においても、第1巻第5章[1095b]の段階では、快楽(ヘドニア)を享楽(アポラウシス)と同一視して扱っている(高田, 1971: 訳注第1巻16)。アリストテレスはその後同書においても快楽論を展開し、最高善と結びつくような快楽についても強調することになる。我々の日常的直観においてもまた、「快楽」を倫理上の悪から切り離す作業という点では、快楽と享楽との峻別が必要となろうが、通常の日本語使用における「快楽」の語は「享楽」を含むものである。避難所生活が「享楽」からは程遠いものであることは明らかであるから、我々の言語的直観は、避難所生活と「快楽」を結びつけることに反射的な抵抗を持つのであろう。他方で、避難所生活が屋外で夜を明かすことに比べて「快適さ」を提供することについても、通常の日本語使用において異論のないところであろうし、心身における快は、ヘドニアの語るところそのものに通じるのである。

ここで再び、思考実験の「太郎」に着眼しよう。「快楽」とは「苦痛」の対となる概念である。明日の学校の非存在が太郎にとってのウェルビーイングであるということは、明日の学校の非存在は、太郎に快楽を提供するが、実際にもたらしているのは、苦痛の除去である。そして快楽や苦痛の大きさは基本的には主観的な尺度で測るものであるから、明日学校に行かなければならない太郎の苦痛は、外部からは完全には計り知ることができない。とするのであれば、人が、先の社会全体のウェルビーイングのリストから、もし太郎のウェルビーイングを排除しようとするのであれば、その動機は何か。もし仮に太郎が短期的苦痛の大きさにより不登校になったり自死を試みたりするような事態が発生すれば、人はそのとき遡って、太郎にとってのユーダイモニアの中身を、正反対のものに書き換えようとするであろう。

これが、リスト増大による困難の理論的側面が投げかける課題であり、これは、ユーダイモ

ニアとヘドニアの対比によっては解決できないものなのである。

なお、ここで用いた架空のリストは理論的なものであり実践価値を持たないものであるが、これが実践的価値を持たない理由は、無限と思えるリストの長さや煩雑さにあるのではなく、これが、ウェルビーイングの存在論的側面のみを勘案したものとなっているからである。ここでは、いつかだれかのなにかについてのウェルビーイングが、他者や社会に知られているか、というウェルビーイングの認識論的側面を完全に度外視している。本論全体としては、認識論的側面こそが「ウェルビーイング」の概念を際立たせるものだ、という位置に立つことになるが、「存在するとは知覚されることである」とする主観的観念論を展開したパークリーの“well-being”使用が示唆を与えるものであると考えている。

## 6. パークリーの「ウェルビーイング」

先の第2節で紹介したように、パークリーの主張の一つである『人知原理論（1710）』には“well-being”という語が、ハイフン付きのこの表記で一度だけ登場する。知られている限り、この著作の時点でこの語は新語に類する扱いではなく、社会にある程度浸透していたことがオックスフォード辞典の記録により推測される。また、「ウェルビーイング」がパークリー哲学の根幹に関わる術語ではないことから、彼の使用法もまた、時の常識に沿ったものであることが予想される。その上で、パークリーの「ウェルビーイング」の語使用に光を当てるべき理由は、彼の哲学的主張との対比において明らかとなる。パークリーは、彼の現象主義的な主観的観念論の主張に対する想定反論に再反論を加える、という形式で論述を行なっている。我々の一般常識は、通常のモノが我々の知覚から独立して存在している、という常識的な意味での実在論によっている。他方、パークリーの主張は、モノの独立した存在を認めず、知覚や認識のみを存在の根拠として主張しようとするものである。ウェルビーイングについて語られるのは、その想定反論の「7番目の反論」に対する議論においてである。

この文脈を見るために、“well-being”が登場する文を、その直後の一節も含めここに引用するが、先に登場箇所の部分のみ現代の言葉遣いで翻訳すると、「**普段の生活では、どんな言い回しであっても、私たちに適切な感情や、私たちのウェルビーイングのために必要な行動をとる気質を呼び起こす限りは、そのままにしておいてよい。**（宇野訳）」といった内容となるであろう。

*In the ordinary affairs of life, any phrases may be retained, so long as they excite in us proper sentiments, or dispositions to act in such a manner as is necessary for our well-being, how false soever they may be if taken in a strict and speculative sense. Nay, this is unavoidable, since, propriety being regulated by custom, language is suited to the received opinions, which are not always the truest.*

*(Principles of Human Knowledge 52節. 斜体および綴りは原著に従う)*

パークリーの「ウェルビーイング」とは、簡単にまとめるならば、私たちが日常生活を穏便に送るための处世術が成功している状態であるということができる。無難に過ぎしている状態、と言い換えることもできるであろう。空気を読んで周りに合わせている状態、という説明も可能であろう。そしてパークリーの用法では「ウェルビーイング」と対立する態度は、「正しさ」や「厳密さ」である。引用箇所少し前に、パークリーは方便として、コペルニクスの宇宙観と天体に関する常識的用語法について述べる。コペルニクスの宇宙が「正しい」と信じている人でさえも、日常生活においては、「日が上る」という表現を用いることが望まれている。つまり、日常的用語法は、哲学的・科学的真理について語る用法とは異なった言語使用をしている。そして、日常的な用法は「ウェルビーイング」のために、そうしているのである。パークリーの意図は、だからこそ、日常的な用法から逸脱していることによって（換言すれば、常識はずれであることによって）、ある哲学的主張を偽とすることはできない、というところにある。

哲学的洞察を日常生活における常識的直観から区別することは、パークリーの哲学的主張にとっては重要なことであった。それは、彼の主張の最初の掴みが、現代でいうところの常識実在論とは対極に位置するものであるからこそ際立つ点である。「ウェルビーイング」とは、この常識的な日常の世界を上手に生きていくために方便を用いて暮らす際に用いられる概念となる。

なお、『人知原理論』に登場する「ウェルビーイング」は、言語活動や日常の語使用における文脈において使われているが、現在の「ウェルビーイング」の重要な側面である、身体的側面については、*A Theory of New Vision* に現れる使用法が示唆的である。当該箇所の“well-being”についてはCarlin (2007) が、パークリーの幸福論につながるものとして着目している。

I think we may fairly conclude the proper objects of vision constitute an universal language of the Author of nature, whereby we are instructed how to regulate our actions in order to attain those things that are necessary to the preservation and well-being of our body.

(*A Theory of New Vision* 57節)

パークリーの現象主義は、我々の知覚（例えば視覚）が創造主である神による自然法則を正しく認識できるものとなる、という点において、知覚に対する懐疑論を提唱するものではない。そして、我々の知覚は、「体の保全とウェルビーイング」を維持するために必要な行動を促すようなものとなる。身体に関するここでの「ウェルビーイング」は、言語活動に関する『人知原理論』での「ウェルビーイング」と全く同じ機能を果たしていることを見ることができる。

パークリーの現象主義において、同じ内容をもつところの一つの「ウェルビーイング」は、

一方では哲学的洞察と日常生活を切り分けるものとして、そして他方では、彼の現象主義が最終的には知覚への信頼の根拠として機能しているのである。つまり、パークリーの哲学にとって「ウェルビーイング」が意味を持つのは、日常生活や身体的な知覚活動といった、人間生活における非思想的な部分、すなわち、もっぱら動物的な局面においてである。彼のこの用法は、*Three Dialogues* につぎの引用部分において決定的となる。

*Phil.* Have all other animals as good grounds to think the same of the figure and extension which they see and feel ?

*Hyl.* Without doubt, if they have any thought at all.

*Phil.* Answer me, *Hylas*. Think you the senses were bestowed upon all animals for their preservation and well-being in life ? or were they given to men alone for this end ?

*Hyl.* I make no question but they have the same use in all other animals.

(*Three Dialogues, First Dialogue*, Dent and Sons. p. 219. 下線は字野による強調。)

ウェルビーイングは人間同様、動物に対しても適用される概念なのである。なお、パークリーは渡米を経て1732年の*Alciphron*の段階においてはより包括的な概念としてウェルビーイングを語るに至っていると思われるが、彼の使用法に時系列的な変化が見られるのかどうかについては本論の射程を超えるため割愛する。本論におけるポイントは、「ウェルビーイング」の語が一般的となった18世紀初頭において、現在に近い、生活感の強い用語としてそれが用いられていたことを確認したことにある。とりわけ、現象主義哲学を展開したパークリーに見出される、哲学的議論と対比されるものとして用いられる用法は、当時の一識者の用法を代表させるに足る文脈を持っていると考えられる。

## 7. アリストテレスの幸福論とウェルビーイング

ウェルビーイングを人間性に関わる概念としてではなく動物的な概念として用いることは、通常の生活の内部においては問題ないとしても、「ウェルビーイング」論としては幾分不適切に感じられるであろう。というのも、我々がウェルビーイングについて語る際には、我々は現代社会における人間的な生き方を問題にしているからである。(自分も含めた)人々のウェルビーイングを願うということは、安全や食料の確保といったものに加え、さらに何か人間的なもの—例えば主観的な幸福感や生きがいなど—といったものが満たされることをもまた、願っているのである。すなわち、少なくとも我々は快樂(ヘドニア)だけではなくユーダイモニアもまたウェルビーイングの一部として捉えていることに、異論の余地はないであろう。

本論での立場は、ウェルビーイング論と幸福論とは、それぞれの基本的な性質において、異



なっている、とするものであった。それは、幸福論においては、我々が幸福の究極的な形態や性質について語ることができるのに対して、ウェルビーイングとは「あれもこれも」という形で、満たされるべき性質が増大する形式を持っているものと規定したからである。幸福論においては、例えば「マッチ売りの少女」のように一見すると悲惨な死の中にも最高度の幸福を見出すことが可能であったり、自分のことを不幸だと信じて疑わなかった人がつぎの瞬間に自分が幸福であることに気づくという事象を可能にする。逆に、周りの人から見てあらゆることに恵まれている人が「実は不幸」であった、という説明も可能になることは、我々の言語使用の日常において認められることである。

しかし他方で、我々はウェルビーイングの成就を、飽くなき欲の全てが満たされる状態である、とも規定しないであろう。「～だけではない」という形で作られるウェルビーイングの究極の形は「全てを持つ」ということではない。先に見た通り、ウェルビーイングのリストは矛盾を含まない形でしか拡張することができないが、それがあらゆるものを含んでしまうことが起こってしまうとすれば、その時リストの内部に矛盾が生じてしまうからである。

しかしながら我々はどうしても、人間のウェルビーイングと動物のウェルビーイングの差分について「ウェルビーイング」の語彙の範囲内において語りたくなるのである。この際しばしば引き合いに出されるのが、中教審の答申にも見られるような、ヘドニアとユーダイモニアの区別なのであった。人間としての我々のウェルビーイングは快楽のみによって満たされるのではなく、ユーダイモニアが含まれることこそが重要なのだ、と考えたくなるのである。もちろんこれは、このままではユーダイモニアがヘドニアに優る、ということを主張しているものではない。しかしながら、ヘドニアだけでは不十分である、ということは明確に主張している。そしてウェルビーイングからヘドニアを差し引いたこの差分にユーダイモニアが含まれる、という主張は、それが人間のウェルビーイングにとって重要な要素であることを示唆していることは否定できないのである。

ここで我々に大きな示唆を与えてくれるのが、アリストテレスの幸福論における快楽に対する態度であり、これが我々のウェルビーイング論にひとつの筋道を与えるものである、と私には思われる。

アリストテレスの「快楽」に対する態度には、いくつかの前提となる洞察がある。まず、快楽そのものは「悪」ではない、という前提である。食欲は快楽をもたらすが、適度の食事は我々にとって必要（現代の用語法でいえば、我々のウェルビーイングに貢献するの）であり、我々が「悪」と結びつけるのは、過度の食事である。食べることが悪いのではなく、食べ「過ぎ」が問題なのである。同様に、我々が悪と結びつけがちなヘドニアは、その性質ではなく量（無抑制）を問題としているのである。このように考えることによって、「快楽（ヘドニア）」と「享楽（アポラシウス）」の混同は避けられる。もう一つの前提は、あらゆる快楽に共通した性質というものはなく、快楽の性質は、経験する内容の種類によって異なっている、ということである。

ある。例えば、よい音楽を耳にした際に感じる快樂と、ジョギングを楽しんでいる時に感じる快樂とは全く異なる性質を持つものであり、それらに共通した快樂そのもの、といえるような何かは存在しない、ということである。

『ニコマコス倫理学』によれば、ある活動そのものから得る活動固有の快樂について、「固有の快樂は活動を増進し、異質の快樂は活動を困難にさせる（アームソン、1988：雨宮訳p. 172）」のである。「ジョギングをすること」は「音楽を聴くこと」の障害になり、それはジョギングをすることと音楽を聴くことが異質の快樂であることを示している。このことは我々のウェルビーイング概念の分析においても有益な分析を提供していると思われる。「音楽を聴くこと」と「ジョギングをすること」のそれぞれに快樂を感じる人にとっては、「音楽を聴きながらジョギングをする」ことは無条件に快樂を提供するものであると思いがちであるかもしれないが、それは間違っている。「ジョギングをする」ことと「音楽を聴く」ことを同時に行うことは、アリストテレスの分別によれば、互いの快樂を障害するようなものである。一方で「音楽を聴きながらジョギングをする」ことは、また別の固有の快樂を指しており、この活動によって得られる快樂の総量が「音楽を聴くこと」と「ジョギングをすること」の2つの快樂の和にはなっていないことを我々が認識することは重要である。これは、5節で見たウェルビーイング・リストの外延における無矛盾性の問題が複雑なものとなることの、思想的な根拠の一つにもなるが、ウェルビーイングが測定可能であるとする実践的課題においては、快樂の量を加算して比較することができない、という点において都合の悪いものにもなる。功利主義的な快樂論との折り合いにおいて、快樂の総和をどのように算出するのか、という経済観をより複雑なものにもするのである。

また、量や度合いについての無抑制に対する批判は、アリストテレスの幸福論における中庸思想と結びついている。アリストテレスにおいて幸福は、極端として生じるものではなく、節度の中に見出されるものであるが、これは我々がウェルビーイングの性質として論じてきた事柄と一致するような種類のものである。ウェルビーイングが成立するためには様々な独立した要素や、度合いにおけるバランスが求められると考えるのであれば、これはアリストテレスの考え方に類似している。この点で、「調和と協調のウェルビーイング」にとって、アリストテレスの快樂論は好都合なものとなりそうである。

他方、アリストテレスの快樂論のもうひとつの特徴は、その快樂主義に表れる。『ニコマコス倫理学』においてアリストテレスは、快樂こそが「最高善（ト・アリストン）」であり、ユーダイモニア（幸福）そのものである、とするのである。先述のようにアリストテレスはあらゆる快樂に共通した一性質を探る代わりに快樂の種類分けを行うが、「その際、快樂のなかでも人間最高の活動に伴う快樂のごときは極度の賛美が与えられる（高田、1971）」のである。さて、ヘドニアからユーダイモニアに至るこの繋がりとは、精緻なアリストテレス研究の成果のもとに理解されなければならないものである。しかし、本論の目的における意義は、アリストテ

レスがヘドニアとユーダイモニアを対立概念として捉えていたのではなく、むしろユーダイモニアの重要な一面としてヘドニアを捉えていた、ということの理解で十分である。

ウェルビーイング論における、ヘドニアとユーダイモニアの比較は、第5節の思考実験で見たように、時間軸における価値の捉え方と密接に関係している。例えば、苦痛であるところの受験勉強はヘドニアを阻害するものであるが、「長期的」には人生の幸福に貢献する、と考えられるものであり、ユーダイモニアにつながるものとして認識される。しかし、長期的な幸福、という比喩は、我々は幸福をいつの時点で評価するのか、という問題に直面させる。「幸福」という語彙は、不慮の死を遂げた者に対して「それでも彼の人生は幸福でした。」と語ることを可能にするような語彙なのである。

それでは、われわれはいかなるひとをもその生存中に幸福であるというべきではなく、ソロンの言葉に従っていえば、「その最後を見とどける」ことが必要なのであるうか。もしそんなふうにいうことが果たしてただしいとしても、それは、しかし、ひとは死んでしまってから初めて幸福なのだという意味なのであるうか。

(高田訳『ニコマコス倫理学』[1100a])

この部分に対するアームソンの次の解説は、幸福（ユーダイモニア）と英語での“happiness”の語の使用法の違いを浮き立たせるものとなっている。

So to say that somebody is *eudaemon* is the very same thing as to say that he is living a life worth living. It is empathetically not to say, as might be the case when one describes somebody as happy, that he is, at the time of speaking, feeling on top of the world, or any other way. To call somebody *eudaemon* is to judge his life as a whole, so that a cautious man, as Solon advised, will not call anybody *eudaemon* until he is dead.

(Urmson 1988, p. 12)

短期的な時間枠における“happiness”は、現代の我々の用語法では、ユーダイモニアよりもヘドニアに近い、刹那的なものとして語られる。他方で、ユーダイモニアに結びつけられる時間の尺は、アームソンの解釈によれば、「意味のある人生を送っていると本人が言明する」という、現在進行形で表現することのできる時制をもつものである。これは、発話者が、意味のある人生を「送っている」といっている、という語りによって成り立つ表現である。この時制に関する文法こそが、我々が「ウェルビーイング」を、ヘドニアではなくユーダイモニアに相当するものとして捉える要因であると考えられる。

そしてここにおいても、ウェルビーイング論は、幸福論と決定的に袂を分かつことになるのである。

アリストテレスの幸福論においては、個別の快樂について、それぞれのユーダイモニアとの関係を分別することが可能であった。すなわち、善い快樂と悪い快樂とを区別する倫理的規準についての考察が可能なのであった。しかし、ユーダイモニックなウェルビーイングについては、少なくとも現在のところは、あくまでも、主観的ウェルビーイングの範囲内でしか語ることができない。すなわち、個々人が自分の生活を振り返り、それを主観的にどのように評価するのか、という判断基準でしか評価することができないのである。

いま、夫の出世のために人生の全てを捧げて尽くす妻がいたと仮定しよう。彼女は自分の生活に生きがいを感じており、ユーダイモニアについての主観的ウェルビーイングの自己評価が高い、とする。ここでそれぞれ別々の文化的背景を持った第三者BとCが、彼女のウェルビーイングを評価するにあたり、Bは彼女の生き様を美德として讃え、Cは彼女の無知と社会的抑圧とを憂いたとしよう。この際、「ウェルビーイング」という概念は、BとCの評価そのものを評価することに耐えうるものであろうか。ここで、「夫の出世のために人生の全てを捧げて尽くす妻」の代わりに「担任クラスの子どもたちのために生活の全てを捧げて働く教師」であれば話がさらに分かりやすくなる、ということが、あるだろうか。これら二つの問いに対する答えは、ともにノーであると思われる。

## 8. 結論

ウェルビーイングという概念は、哲学的には脆弱な、あやふやなものである。しかし、その不明瞭さこそが、日常生活におけるこの語彙の使い勝手をよいものにしている、と思われる。つまるところ、我々は18世紀初頭のパークリーが用いていたのと同じような、極めて日常的な用法において「ウェルビーイング」という語彙を使っているのであり、それについての自覚が必要である。ウェルビーイングは、文化や共同体を越境することのできる概念なのか―「幸福」については、多くの人がそれを人間に普遍の問題と捉えているにも関わらず。

繰り返しになるが、本論では、以下の2点を論じ、強調した。

- (1) ウェルビーイング論と幸福論とは質的に異なっており、包含関係にはない。
- (2) 「ウェルビーイング」は哲学的概念ではなく、パークリーが用いた意味での、常識的、世俗的用法で用いられる語彙である。

その過程の議論においては、つぎの主張も含まれることとなった。

- (3) ウェルビーイング論においては、ユーダイモニアのみならずヘドニア（快樂）を再評価するべきである。

「ウェルビーイング」の概念は脆弱であるが故に、我々はそれを丁寧に育てていかなければならない。とりわけ、「快樂」や「幸福」といった概念との関係については、さらに詳細な分

析が求められる。さまざまな「主義」の先に協調の光を見出すにあたっては、手垢のついていない語彙こそが有用な働きを担うであろうから。

## 参考文献

- アリストテレス（高田三郎 訳）（1971）.『ニコマコス倫理学（上）（下）』, 岩波文庫 青 604-1, 2.
- ウェルビーイング学会（Japan Well-being Society）（2022）. *Well-being Report 2022*.
- 内田由紀子・ジェルミー・ラブリー（2022）.『教育政策におけるウェルビーイング』, 文部科学省 中央教育審議会 教育振興基本計画部会（第4回）資料.
- 内田由紀子・文部科学省（2023）.「次期教育振興計画ポイント解説～ウェルビーイング編～」(中央教育審議会委員), 文部科学省 *mextchannel* 配信動画.
- 白井俊（2020）.「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来:エージェンシー、資質・能力とカリキュラム」, ミネルヴァ書房.
- 世界保健機構（WHO）憲章前文（1946, 1951日本公布）. 日本WHO協会仮訳：  
<https://japan-who.or.jp/about/who-what/charter/>
- 中央教育審議会（2021）.『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申案）』
- 中央教育審議会（2022）.『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）』
- 信原幸宏（2022）.「ウェルビーイングと人生の意味」, 東洋大学国際哲学研究 pp. 63-79.
- 文部科学省（2023）.『次期教育振興基本計画におけるウェルビーイングの検討状況について』（令和5年5月10日 里見朋香 文部科学省 大臣官房審議官（総合教育政策局担当）による発表資料：<https://www.unicef.or.jp/jcu-cms/media-contents/2023/06/7cb45c38d3b196c64fac8ff2fb357e09.pdf>）
- Berkeley, G. (1709). *A New Theory of Vision*. in *Berkeley A New Theory of Vision and Other Writings* (1910, reprinted 1963), Everyman's Library, Dent & Sons Ltd.
- Berkeley, G. (1710). *A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge*, *ibid*. 翻訳：宮武昭 訳（2018）「人知原理論」, ちくま学芸文庫ハ-49-1.
- Berkeley, G. (1713). *Dialogue Between Hylas and Philonous*, *ibid*.
- Berkeley, G. (1732). *Alciphron, or the Minute Philosopher*.
- Carlin, L. (2007). "Selecting a Phenomenalism: Leibniz, Berkeley, and the Science of Happiness." *Journal of the History of Ideas*, 68 (1), 57-78.
- Hawkins, J. (2014). "The Four Approaches to Measuring Wellbeing," in Podger, A. and Trewin, D. (2014), *Measuring and Promoting Wellbeing*, ANU Press.
- Kenny, A. (1992). *Aristotle on the Perfect Life*, Oxford University Press.
- OECD (2013). *Guidelines on Measuring Subjective Well-being 2013* :



- [https://read.oecd-ilibrary.org/economics/oecd-guidelines-on-measuring-subjective-well-being\\_9789264191655-en#page29](https://read.oecd-ilibrary.org/economics/oecd-guidelines-on-measuring-subjective-well-being_9789264191655-en#page29)
- OECD (2020). *How's Life?* :  
[https://www.oecd-ilibrary.org/economics/how-s-life\\_23089679](https://www.oecd-ilibrary.org/economics/how-s-life_23089679)
- OECD (2020). “Executive summary”, in *How's Life? 2020: Measuring Well-being*, OECD Publishing, Paris.
- Oxford English Dictionary (2023). s.v. “well-being (n.) , sense 2,”  
<https://doi.org/10.1093/OED/9993240956>.
- Urmson, J. O. (1988). *Aristotle's Ethics*, Basil Blackwell. 翻訳：アームソン J. O. 雨宮健 訳 (2004) 『アリストテレス倫理学入門』 岩波書店.
- Waterman, A. et al. (2010), “The Questionnaire for Eudaimonic Well-Being: Psychometric properties, demographic comparisons, and evidence of validity,” *The Journal of Positive Psychology*, 5 (1) pp. 41-61.